きびのさと

NO.58
月刊
第四輯 戦争篇 第七号
昭和廿八年四月一日 発行 （非売品）
岡山県都窪郡吉備町東町一二五 宇垣方
吉備観光協会
50号続き

藤戸の合戦（その二）

合戦後の両軍の形勢

源三河守範頼はこの一戦に平家の先遣部隊を撃破し、土肥実平を守備のため駐屯せしめ、自ら部隊を指揮して西海道へ発向した。その翌四年の春二月平軍はまたも児島を奪回すべく、窃々に増兵を潜行して藤戸の東、塩干に城寨を築いて行動を開始した。土肥実平はこれを探知して五十余騎を率いて暗夜に乗じ、藤戸の渡を渉って急に城砦に迫ったので、平軍は戦はずして城を明け兵舩によって逃走するを追跡し損害を与えた。ここに初めて備前、備中の将兵は多く源軍の威勢に服し従ふものは数知れず、しかるにその翌三月、再び平軍は執拗にも百余艘の兵舩を整えて襲撃してきた。城兵は備え薄く邀撃に堪えかねて、大将土肥実平以下破れて再び備中へ退却した。この戦いに子息の遠平は疵を受け、雑兵どもの討捕へられたものは多く敗北したのである。一方源義経は四国の阿波に上陸し当面の敵兵を掃盪しつつ屋島の根據地を覆滅したので平家一族は軍舩を連ねて西海に逃れた。ここに児島の陣営はやむなく撤廃して合流したものもあれば、源軍に降伏して身の安全を願ふものもあって完全に児島は源軍方に帰服したのである。かくて平軍は海上に日を送り長門の壇ノ浦へ落延るのであるが、行末を案じて途中備後の鞆ノ浦に宮仕への女性たちを下舩させた。（鞆は王朝時代外国の使臣の寄泊地で風光の明媚な所である。朝廷はここに接待役として官妓を置いていた絶勝の地である。敗戦の犠牲になった宮女たちは生活に窮し次第に自制心を失って春をひさぐ遊女にまで堕落した。これがこの港の遊女町の始まりという）。すでに日没の運命にある平家一族は壇ノ浦の海上戦で最後の頼みとしていた九州勢は俄かに源軍に寝返し、寿永四年三月の廿四日、全くほろび去ったのである。「平家一族にあらずんば人にあらずし。」と誇った二十

年の栄華は槿花一朝の夢のあと。驕るものの久しからざることは今も変りはない。平家物語に最后を記した一節を引用する。「主上あきれたる御有様にて、そもそも尼前、我をば何地へ具して行かんとはするぞと仰せられければ、二位殿若き君に向ひまゐらせ、涙をはらはらと流して君は未だ知ろし召され候はずや、先君は十善戒行の御力によりて今萬乗の主とは生れさせ給へど悪縁に引かれて御運既に盡きさせ給ひ候ひぬ、先づ東に向はせ給ひて伊勢大神宮にお暇申させおはしまし、其後西に向はせたまひて西方浄土の来迎にあづからんと誓はせおはしまして御念佛候ふべし、この国はぞくさんへんぞと申して物憂き境にて候ふ、あの波の上にこそ、極楽浄土とてめでたき都の候ふ、それへ具し参らせ候ぞと様々に慰めまゐらせしかば、山鳩色の御衣にびんづら結ばせ給ひて、御涙におぼれ小さく美しき御手を合せ、先づ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮、正八幡宮にお暇申させおはしまし、その後西に向はせ給ひて御念佛ありしかば二位殿やがて抱き参らせて、波の底にも都のさふらふぞと、慰め参らせて千尋の底にぞ沈み給ふ」。とある。主上とは安徳天皇、二位殿は平清盛の妻で、天皇の外祖母にあたる。天皇はこの時八歳であった。

今ぞ知る御裳濯川（みもすそがわ）の流には　浪の下にも都ありとは　二位尼

合戦の結果

佐々木三郎盛綱はこの先陣の功により源頼朝から自筆の感状を賜はり児島の内、波佐川の庄（いまの迫川という）の地を領した。感状は

「自古渡河雖有先例未聞遙渡海之例盛綱之振舞稀代之勝事也」

とある。当時児島は五流一山の領地であったので眞瀧坊法眼は鎌倉幕府に訴訟を起し、旧領地の返還を迫り廿七年間も滞在して交渉を続けた。当時実朝将軍の時代に移り承元四年九月十九日（一二一〇）勝訴となり再び彼の地は五流一山に帰したのである。訴訟のながびく例は昔からあったらしい。近い例では近友地内に起っている土地所有権の争いである。これは近友の部落民が耕作していた旧足守川の廃河地帯へ無断で住宅を建てて私有物化した人があってその人と近友の部落の人たちとの間にもつれが出来た。その真相はさておき、すでに十年余も経過しているがなかなか「話せばわかる」ようだが未だ解決の見通しはないらしい。廿七年もつづくのではないかと思ふ。

盛綱が一時領有したことは確かなるも児島に赴任したことは何等の文献もない。その子信実は北條氏に従ひ戦功をあらわし、承久の乱に頼仁親王を守護して児島に供奉したことがある。

佐々木氏の署原は

佐々木三郎盛綱（児島地頭）― 信実 ― 秀忠（磯部氏の祖）

実秀（加地氏の祖 代々児島に住す）

時秀（東郷氏の祖代々児島に住す）― 胤泰（飽浦姓）― 行胤 ― 長胤 ― 信胤（北朝方に従い飽浦に住す後ち小豆島嶮岨山に城築す）

顕綱

盛綱の末葉信胤は飽浦三郎左衛門尉といい、備前の飽浦城に居る。始め細川定禅に与みして足利氏の覇業に武勲をたてたが、当時京都洛中の三美人といわれる菊亭の遊女、阿才局に懸慕した。その頃女たらしで有名な高直師と争い、終に信胤が奪い去ったことが原因になって興国元年（一三四〇）に小豆島に逃れ、安田の海抜二七三〇尺嶮岨山の頂上に城築して（城は星ヶ城、又は方士城ともいう）南朝に帰属し瀬戸内海の海上権を握り武威を振い、脇屋義助が伊豫ノ国に旗上げした際には、この挙に援助した。正平二年（一三四七）に武家方の細川師氏の襲撃を受けて破れ、妻子、臣妾は悉く害された。信胤は逃れて四海の長浜に落延びたが、ここで最期をとげた。いま信胤を祀る飽浦大権現という一小祠がある。

信胤が討死したのは正平四年六月三日の未明で、長浜の殿條という所で飽浦氏の別荘があった。ここで敵の武者と組打ちしていたが、未明のことで敵味方とも見分けがつかない。折柄一人の村民が浜辺から海草を担い、この勝負をみていた所へ、一人の武者がやってきた。村民に殿様は上か下かと、問うた。村民はなにげなく下の武者と答えたので、この武者は忽ち上の勇者を殺害した。しかるにこの勇者こそ信胤であったので驚愕し、その所に死骸を埋めて弔い、しるしに大石をもってこれを覆い、我身は傍の井戸に投じて終ったという傳説が遺っている。

○傳説にのこる古戦場の史蹟地

△鞭木

粒江にある。佐々木三郎盛綱が日間山麓の一枚畑にて乗馬を入れた所から一直線に舩津原、先陣庵に向って上陸した際、馬を憩はせ、持っていた熊柳の鞭を挿し忘れたが、程経て芽を出し、ついに大木となったのでこの地を鞭木という。村民たちはこの樹木を保存していたが、寛文年間になって強風のため倒れて枯死したが、天城の人、山脇十次郎恭暢がこの古木をもって武裝している盛綱の像をつくって藤戸寺へ奉納した。

後世榎、椋の両樹が生長していたが、榎は貞享四年九月九日の大暴風雨の夜、倒壊した。椋も間もなく枯死した。「吉備前鑑」に、この椋樹は根の元廻り八尺七寸、榎樹は一丈許りにて二俣になっていた。とあり。其の後椋樹の芽が生じて又繁茂していたが、不幸にして明治十七年八月下旬の大風雨の際、倒れた。いま三代目の椋樹が成長しつつある。

香ばしき里の名にこそ残りけれ　さしたるむちの枝葉しげりて　若林正旭

△経島

天城の片原にある一小丘にして老樹鬱蒼として全丘を覆い、丘上に二つの石塔がある。左を漁塚といい高さ九〇糎六角造り。右を経塚といい高さ一六五糎の五輪の塔の形をしている。漁塚は俗に浦男の石塔といい、盛綱が先陣の端をなした浅瀬を教えた浦人の供養塔である。藤戸寺の過去帳に、名は義大夫、法名は「性海道教」という。経塚とは盛綱が浦人を殺害したので菩提のため建てたと傳えられている。寺傳によると、佐々木盛綱が入部して当寺に詣で浦人のために経王頓写の法儀を営み、冥福を追修し、その経を埋めたのがこの塔という。往時は海中の一島嶼であったがいまは陸続となり荒廢のまゝに委せていたが、整地し域内に日露戦役忠死者の旌忠碑を建てている。

△浮洲岩

粒江と藤戸の境にある。往昔は海水の干満にも常に海面に浮流しているように眺められるのでその称がある。この岩は豊臣秀吉が全盛時代、天下の奇石を集めた際、選ばれて京都の聚楽亭の庭前に据えられていたが、後ちに轉々として現在は醍醐寺の境内にあるという。その跡には遺蹟を永遠に記念せんがため正保二年（一六四五）に「浮洲岩」の石碑を建てた。高さ二二〇糎である。其の後元禄十一年（一六九八）に街道から細道をつくり、同十三年五月に「浮洲岩江近道」の道標を街道のわかれ道へ建てたのである。

浮名営在碧波隈　虚認池塘碑上苔　恵是滄桑感人去　若林正旭
神鷲義詰入蓬來

△先陣庵

粒江にある。山号を元暦山という。盛綱が両軍の戦死せし将兵と、浦人の追福を祈るために先陣した土地を選んで一堂宇を創建したと云ふ。その後浦人の孫娘が尼になって勤経供養したとか、盛綱の孫娘が削髪してこの地に住したともいっている。當庵に安置する本尊は観世音菩薩である。

六百年前舊戦営　先登猶認竹庵名　春潮一派通田温　菅茶山
野菜花中海舳行

△正森山（篝地蔵）

藤戸寺の後方の高地にして、いま畑地になっている。ここは平軍の首将左馬頭行盛の本営を置いた所である。この峯の南方松尾山に篝地蔵がある。平軍の陣地にして篝火を焚いた跡という。亭々とした松樹のもとに石地蔵尊が安置してある。

△腸川

浮洲岩に近く、舩津原と沖ヶ市のさかいを海に注ぐ渓流にして、浦人の死骸が浮洲岩にかかり、その腸から起った名という。

△引馬嵶

粒江から郷内の串田に通ずる峠にして、盛綱が入部した時、浦人の母親が無情を訴えんとして盛綱のあとを追い馬を引き止めた所というのでその名がある。

△浦人屋敷址

藤戸寺の南方十町計り山中を登ると、ここには昔浦人が住居していた跡があったというも、いまは其所在を詳にしない。浦人の末葉は現在の粒江に住し先知平治という、先知は先を知るの意から姓を佐々木氏から賜ったという。

△濁川と誓紙井

濁川は粒江の廣木にある。溜池にして盛綱が鑓を洗ったのでその水が濁ったという。また誓紙井というは佐々木氏が入部した時、村民の重なものを集めて二心なき誓紙を作らしめ、忠誠を誓はした用に供した井戸という。

△笹無山と乗出松

有城から天城に通ずる街道の傍に笹無山と呼ぶ小丘がある。浦人の母親が我が子の惨殺されたことを聞いて歎き、佐々木といへば笹まで憎い、といってこの小笹を毎く抜き取ったので、後世笹の生長することがない。とよってその山名がある。また一枚畑という所に乗出松がある。盛綱がこのあたりから馬を乗り出し、海上を東南に進んで対岸の児島へ上陸したという当時潮流は西の水島灘から東へ流れていたので、その流れに従って進撃したものと思はれる。もと記念の老松があったが、いつの頃か枯死してしまったのである。

△佐々木谷と鞍置石

日間山の南麓にある。盛綱の陣所を置いた所で、南の端の出崎を乗出崎という。鞍置石はこの佐々木谷にあり盛綱が鞍を置いた所という。

△琴捨薮

粒江から浦田にいく峠を清瀧越という。一名平家越ともいい、その傍にある。平軍が敗れて遁走の時、源軍の追撃が急であったので、琴を捨てた薮という。
以上がこの地に遺る傳説である。古戦場見物の資に供したい。

△補陀落山藤戸寺

倉敷市藤戸の堂山にある。真言宗御室派仁和寺の末で、本尊は千手観世音菩薩である。縁起書に従えば慶雲二乙巳年（七〇五）にこの沖合の海から出現した尊像にして行基菩薩が聖武天皇の天平年間に龍光寺　光明寺　醫王寺
法泉寺　安養寺　吉祥院　瑞雲寺　彌勒寺　怯幢院　雲山寺　不動院　潮

音院など十二ケ寺を建立した際、ここに祭祀したのが開基になっている。其の後平城天皇の大同元丙戌年（八〇六）に空海が宗ならら帰朝した歳に征夷大将軍坂上田村麿が勅命を奉じて堂塔の完備に努めた。下って鳥羽法皇の仁平元年（一一五二）八月十七日に大般若経六百巻を納め勅願寺に定められた。其の後天文年中（一五三一一五五四）に兵火によって損害を受け、また天正八年（一五八〇）には宮山城主戸川秀安が宗派の争論から境内に乱入し、堂塔伽籃を盡く灰燼に帰せしめた。この時本尊は火焔に包まれたが不思議にも一部を焼損したのみで取り出すことを得た。いまにその根跡が残っている。後ちに本尊を奉蔵したのである。寛永八年（一六三一）十月には備前国主池田忠雄が荒廃した伽籃を再興し更に天明元年（一七八一）十月、池田治政が増営し漸く輪奐の美を備えるに至った。当寺は郡内の名刹にして代々備前国主の尊崇は深く寺領として数度の寄進をしている。

寺宝として傳るものに

一、寄進状一幅佐々木将範筆康暦二年五月八日

一、藤戸寺之図一幅
　狩野祐勢正信筆寛文二壬寅年五月廿五日

一、不動明王一幅
　覚鑁上人筆貞享四丁卯年三月

一、藤戸之浦合戦図二幅　筆者不詳

一、釈迦如来出山之図一幅　雪舟筆

一、千手観音外二体　兆殿司筆

一、西三條殿公和歌　明和二年寄進

一、佐々木盛綱木像一体
　山ら飛龍育作寄進

一、盛綱藤戸先陣之図一幅
　狩野牧斎筆明暦四戊年六月

一、佐々木盛綱之像一幅
　松平紀政筆享保十七壬年二月十四日

一、額面宝鏡寺宮御筆享保十七年三月

一、盛綱藤戸先陣之図一幅
　松平紀政筆明和元年八月

一、客竹和歌短冊大石良雄筆

一、和歌一幅林鐘従二位筆元禄十四年

一、纏、左風神左雷神佐々木盛綱寄進
其の他数点ある。

以上

△藤戸に関する歌詩

藤戸懐古

佛閣高臨藤戸浜　繚回弔古一傷神　曽驚鉄騎相超海　何識漁郎夜指津

権木放鞭名末朽　孤巒前篠跡猶新　老僧為當説年事　切罪倶帰十二因

赤松勲

藤戸八景

河口静斎

塩干帰帆　潮来山色蒼　潮出海水天白　布帆待西風　今夕誰家泊

鞭木夕照　社士投鞭處　長流断幾年　魯陽今不見　空對夕陽懸

浮洲落雁　荒潮思往事　菖作血痕班　雁群飛不度　霜満碧鏡湾

経島秋月　牛夜弔古魂　秋風吹不歇　昔時三尺水　光射一輪月

藤戸夜雨　蕭々孤館雨　秋露鎖長浦　哀怨不可堪　無田尚呂姥

粒江暮雪　天低雲紛々　北風日欲曛　渡頭人跡絶　無復水犀軍

一夜晴嵐　月照帰雲宿　風倦遠嵐軽　不知海水盡　猶作波涛聲

西明晩鐘　日暮牛羊下　深林古寺鐘　虎丘人始別　倚伏着前峰

○

わたつ海ものどけなりけり君が代は藤戸の島に波のあらねば　善滋為政

はなさけば立ちし千なみも紫に見ゆる藤戸のわたりなりけり　家経

定めなき空のけしきのおい風をまつ藤戸をかけてさりぬる　俊頼

大御舩したなる浪はかくれども藤戸をさしてしまなくれつつ　顕家

武士の馬より行きし海つ路は田となりぬれど名は（不明）もるる　藤井高尚

荒妙の藤戸の浦の若和布売おとめ少女は見れと不飽鴨　平賀元義

○

藤戸懐古

芦荻蒼茫野渡頭　先登遺蹟有浮洲　鯨波聲絶蛙争闘　鉄騎影空螢暗流

豈翅滄桑千古裏　還知蒂蠕一時休　摧残唯見投鞭樹　長使騒人題客愁

西山拙斎

藤戸

戦場全入墾田中　江汐猶餘一線通　底是先登渡馬處　南村北巷緑秋風

菅茶山

一寸徳兵衛（第十輯　傳説篇　第二十三号続き）

下撫川と中撫川との界になっている所の下撫川分に古屋敷という田圃がある。ここの畦畔に雨露に晒されて銘の堙滅した古い墓石がある。この墓地は土佐屋先祖として祭祀しているが、昔から一寸徳兵衛が永遠に眠る奥城といっている。徳兵衛は元文、寛保の頃の侠客にして芝居の浪華鑑に出てくる主人公である。正説によると徳兵衛の先祖は山陰の豪族尼子氏の兵糧方をしていた牧　兵庫介から出た家筋でその子孫が松山藩主水谷出羽守の時代に玉島市の上成に来住して庄屋を勤めたという。徳兵衛は初代徳兵衛から三代目にして、故あって撫川の西向に住し、この地で生れたという説が古くから傳っているが実証すべき文献はない。ただ傳説としてここに掲げる。徳兵衛は幼少の頃から剣道、柔道に達していたので到底田舎に腰がおさまらず、家を飛び出して浪華（大坂）に赴き大親分の床亀の處へ客分に入った。当時大坂には円七九郎兵衛という親分がいたので、これと三人で義兄弟のさかづきを替はし一角の侠客の親分格にのしあがった。生来道理の前には如何なる権力も威光にも怖れず、何者がきても一寸も退かぬ意地の強さがあったので一寸徳兵衛の一寸といはれる所以はここにある。

実話として傳るものに、徳兵衛が芝居見物にいって観劇していると二階の客が火のついた煙草の吸玉を徳兵衛の頭の上へ落した。徳兵衛は一向知らぬ風をして二階へ上ってその吸玉を落した人に拂はしたという。また大阪天神祭りの時に東毛と西毛とにわかれたダンジリを練って、どちらも早く天神様へ繰込む競いが毎年行はれていた。所が毎年西毛は東毛の組に勝ちを占められて残念に思い、今年は是非とも先を争ってやろうと、西毛の若い連中がこの徳兵衛に相談を持ちかけた。「よし今年は私しが勝たしてやろう」。と請負った。六月廿五日の天神祭りの当日、双方のダンジリは威勢よく競いたったが、例年の通り西毛の勢は振はない。東毛の組が真先

に進んで天神宮の境内に差しかかった時、緋縮緬の襦袢をきた一人の若者がその行手に寝ころんで動かない、東毛の若者は「起きぬと踏潰すぞ」。といきまいたが「通れるものなら通ってみい」。といって揉んでいる間に西毛のダンジリは進出して初めて勝を得た。さては西毛のまはし者か「やっつけてしまえ」。と東毛の方で氣がついた時は、緋縮緬の襦袢のみをその場に抜ぎ棄て徳兵衛はどこかへ去ったあとだったという。また徳兵衛の知人若がヒイキにしていた芸妓があったその芸妓に心を寄せている侍がいた。それは町道場を開いている剣術の先生で青柳某という乱暴者であった。その侍との間に争いが起った。侍は腕づくでも奪ろうというので芸妓はなかに挟まって困っていた。これを聞いた徳兵衛は節に訴いて女の本心を確めた。女は青柳を厭っていることが判ったので身受けの金のことも何にも引受けた。蛇に睨まれた蛙のような女に災難があってはならないと、一時女の姿をかくした。この事を聞いた青柳は怒って表面は仲直りの態で徳兵衛を或る料亭に招いて強か酒を飲ませた。快よく酔った徳兵衛は夜が更けてから千鳥足で帰る途中数人の門人を先廻りさせて暗殺しようとした。徳兵衛はこれを豫期していたのであろう。暫らく切合っていたが徳兵衛の腕にはかなわず、青柳を始め悉く門人たちは死傷した。徳兵衛は直ちに奉行所へ自首して出たが取調の結果青柳に非があったので許されたという。徳兵衛は侠勇を知られた人であったが、このことがあってから間もなく大阪を去って上成の地に帰り病気になって廿四歳の若さで、この世に別れを告げたのである。墳墓は上成の小丘にある牧家先塋の域にある。そのなかの一基「秋月照円清信士」と刻まれており、側面に「延享二年八月四日没　享年三十四才」。とある。この墓には大阪方面の遊侠や俳優などの人が時折り詣でて誦経したり香華を手向けていくということである。傳説による下撫川の墓はこの地が徳兵衛の生れ故郷なので縁故のものが、その死を惜んで建てたものではないかと想像せられる。しかし土佐屋（第四輯城趾篇芝場城跡参照）との関係はわからないのである。

（おわり）

トモエ葬儀社
吉備町平野
国道筋
電話44番

丸中運送
吉備町
下撫川
TEL
178